

受賞講演

日本哺乳類学会 2024 年度学会賞受賞記念講演

染色体とモグラと標本と Chromosome, mole and specimen

川田伸一郎 (国立科学博物館・動物研究部)

Shin-ichiro Kawada (Department of Zoology, National Museum of Nature and Science)

僕と哺乳類学の出会いは弘前大学理学部生物学科の卒業研究で、小原良孝先生の第二講座(系統及び形態)に所属した時から始まる。「ネズミかコウモリかイノシシから選びなさい」と研究テーマについて話があり、「ネズミを選べば北海道でフィールドワークができる」との情報を得て、僕はヤチネズミ類の染色体比較というテーマで研究を始めることになった。大学院修士課程では対象動物の変更を迫られ、ヒミズとヒメヒミズの染色体について比較研究をやることになった。これ以降一貫してモグラ科食虫類の研究を続けている。

最初に染色体研究に手を染めたのは幸運だった。実験手法はとっても面倒だが、誰もやりたがらないため新知見を得放題。染色体を観察するためには生きている細胞が必要なので、どうしても野外で生きている動物個体を捕獲する必要がある。十分な材料を得るためには、その動物がどんな環境を好み、どのような場所にワナを仕掛ければよいか理解する必要がある。おまけに僕が弘前時代に染色体を調べたヤチネズミ類やヒミズ類は、いずれも種同定に歯の特徴を調べる必要もあったので、頭骨標本作製するなどの作業も必要だった。動物研究の基本的なところが全部詰まっていると、僕は今でも思うのである。

修士課程修了後の進路について何も考えていなかった僕は、一年間のブランクを経て、名古屋大学の織田銃一先生の研究室に入門。博士課程で本格的にモグラ類の染色体研究を始めることになる。この年から哺乳類学会に入会し、群馬大会がデビューだった。皆さん自由な服装で楽しそうに哺乳類について語り、群馬県立自然史博物館の駐車場で車中泊する大勢の会員との集い。学会ってこんなに楽しいものだったのかと初めて知った。研究の進め方も海外へモグラを採集に行くなど規模が拡大し、捕獲記録すらほとんどないアジアのモグラの染色体については、簡単に論文ネタにできるものだった。織田先生からは10か月のロシア滞在も斡旋していただき、この間の博物館での標本調査によって僕は「比較形態」というもう一つの武器を得て、本格的にモグラの分類を考えるようになった。新種として記載した2種と、ミズラモグラを新属記

載したのが、たぶん最大の成果だろうと思う。そのほかロシアの博物館で観察したアルタイモグラの頭骨約 1800 点で歯の変異を調べた論文などあるが、このころから「日本にもかようなコレクションを」の目標に向けて、標本作製に尽力するようになっていく。

たぶん哺乳類学における僕の価値は、この標本作業を徹底的にやってきたことだろう。2005 年に国立科学博物館に職を得て、標本収集活動はエスカレートした。クリハラリス、ヌートリア、ニホンカモシカ、アマミノクロウサギなど膨大な死体を様々な研究機関から受け入れるイベントが続き、博物館のコレクションは日々成長を続けている。

日本哺乳類学会 2024 年度奨励賞受賞記念講演

モモンガ、マグロ、イワシ、そしてシカ Flying squirrels, tunas, small pelagic fishes, and deer

鈴木 圭 (森林総合研究所九州支所)

Kei Suzuki (Forestry and Forest Products Research Institute, Kyushu Research Center)

タイトルの動物たちは、私のこれまでの研究対象である。文字にして並べると哺乳類は半分だけだが、研究期間はモモンガが9年、マグロが2年、イワシが3年、そしてシカが6年目になる。年数で見れば4分の3は哺乳類の研究をしているので、胸を張って「哺乳類学者です」と言いたい。ただ、研究対象の移り変わりからわかるように、一貫した研究テーマというのが明確ではない。無理矢理括るならば、「人と野生動物の関係」くらいだが、この便利な括りは私のキャリア形成に大きく役立った…かもしれない。

私は学位取得までニホンモモンガとエゾモモンガの生息地保全をテーマに研究を進めた。当時、ニホンモモンガの研究は全く進んでおらず、どこにいるのか？何を食べているのか？そんなこともわかっていなかった。しかし、調べていくと意外なことに本種は人工林を好むことがわかり、人工林管理が生息地保全に重要であると提案した。一方、エゾモモンガは帯広市の市街地林や大学のキャンパス内にも棲んでいた。そういった環境では開発の影響を受けやすいため、巣の選択性や滑空移動に利用する樹木などを調べ、本種の生息を考慮した市街地林管理について論じた。両種とも夜行性の樹上生活者であるため見かける機会は少ないが、意外にも人の手が加わった環境に棲む動物といえる。

学生生活が終わり、最初に就職したのは水産総合研究センター（現、水産研究・教育機構）だった。研究等支援職員として入所し、後に任期付き研究員となったが、この間マグロとイワシの研究に従事した。ここでの研究の詳細は省くが、ここで得た統計解析やデータ管理の技術、そして資源管理の知識なしには、その後のシカの研究を進めることができなかったことは間違いない。

次の所属は現在の森林総合研究所で、シカの個体群管理について研究している。最初の頃は前職で得た技術と知識を基に、九州のシカの個体群動態の推定と捕獲の効果について検証した。その過程で、メスの捕獲が個体群を効果的に縮小させることがわかったため、現在はメスの効率的な捕獲方法について研究している。

ここまで私の研究歴について紹介したが、「なぜ突然、魚の研究を？」と疑問に思った方も多いと思う。就職してから幾度となく聞かれたし、就活の面接でも必ず聞かれた。当時の心情としては「とにかく入れる所に入って研究を続けないと…」という焦りが強かったが、口では「人と野生動物の関心に興味があって、水産業は人と野生動物の関心の歴史そのものだと思うから」と答えた。興味があったことは本当である。その答えが効いたのかどうかはわからないが、今日まで無事に研究を続けてくることができたし、この度奨励賞に選出して頂くこともできた。若手研究者の就職は引き続き困難で、やりたい研究を継続できない方も多いと思う。でも、今までと違う研究を始めることでわかることや技術の習得があるかもしれない。その場その場を楽しんで研究を続けて欲しい。